

中学校説明的文章における機能語の出現状況

——「情報の扱い方に関する事項」の指導を考えるために——

松崎史周

一 はじめに

平成二九年告示の新学習指導要領における国語科の内容は、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」から構成されている。このうち〔知識及び技能〕に新設された「情報の扱い方に関する事項」は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域で意識的に扱うことが望まれるが、とりわけ「読むこと」の学習指導、それも説明的文章の学習指導で扱うことが中心となるだろう。

話や文章に含まれる情報と情報の関係を捉えたり、自分のもつ情報を整理して、その関係を明確に示したりすることは、話や文章を正確に理解し、適切に表現することにつながる。思考力・判断力・表現力を育成するうえで、理解においても表現においても、情報と情報の関係を的確に捉えることが重要となってくるが、小学校学習指導要領では、情報と情報との関係として、「共通、相違、事柄の順序」「考えと理由や事例、全体と中心」「原因と結果」といった項目が、中学校学習指導要領では「原因と結果」「意見と根拠」「具体と抽象」といった項目が挙げられ、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語活動を通して指導することとされている。

説明的文章の学習指導においては、教材文の内容や特質を踏まえて、これらの関係の中から文章の読み取りに有効なものを選び、それを観点として文章を読み進めていくことが重要となってくる。例えば、筆者の考えや意見がどのような理由や事例、根拠に基づくものなのか、文章に挙げられた事象がどのような原因によって生じ、どのような結果になったのかを捉えていくことなどが考えられるが、このように情報と情報の関係を押さえながら読むことで、文章の内容や要旨を捉えることができる。同時に、説明や論証の仕方といった筆者の論じ方を捉えることができる。

この際に心掛けたことは、文章の表現に基づいて情報と情報の関係を捉えていくことである。文章の表現を踏まえることなく情報と情報の関係を捉えても、文章の内容や要旨、筆者の論じ方を的確に捉えることにつながらず、自分のもつ情報を適切な形式を用いて表現することにつながっていかない。情報と情報の関係を捉えながら説明的文章を読む際に指標となる言語形式として「機能語」が挙げられるが、文章中の情報と情報の関係がすべて機能語によって示されるわけではないもの、小・中学校国語教科書における説明的文章の場合、機能語によって示される度合いが高く、機能語に着目することで、文章中の情報と情報の関係を明確に捉えることができ、自分の持つ情報を相手に伝わるように示すことができる。

では、情報と情報の関係を捉えながら説明的文章を読むうえで着目すべき機能語とはどのような表現だろうか。本項では、学習指導要領に示された情報と情報との関係を踏まえて、中学校説明的文章における機能語の出現状況を調査し、その結果を踏まえて、各教材文で扱うべき機能語を挙げるとともに、機能語に着目した説明的文章の学習指導について述べていくこととする。

二 機能語とその認定

機能語とは「意味内容が希薄でもつばら一定の文法的機能を果たすために用いられる」語である。機能語の中心は学校文法における助動詞と助詞であるが、いわゆる複合辞を含めることもできる。複合辞とは「いくつかの語が複合して、全体として助動詞・助詞として機能するようになったもの」^②で、「に違いない」「なければならぬ」などの複合助動詞と「について」「からには」などの複合助詞に分けられる。

こうした複合辞は、一般的な文章はもちろんのこと、国語教科書における説明的文章にも多用されており、文章内容を理解するうえで重要な表現になっている。渡辺(二〇一七)は、国立国語研究所のBCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス)のデータを用いて、国語教科書における複合辞の学年別使用状況を調査しているが、その結果から小学校中学年以降の国語教科書において複合辞が多用されており、複合辞に着目することが文章を理解したり作文を書いたりするうえで有益であると指摘している。^③

ところが、国語科の学習指導に用いられる学校文法では、文が単語ごとに分割、品詞分類されるため、複合辞の持つ意味・機能が捉えにくくなっている。この点を捉えて、渡辺(二〇一八)は「いわゆる学校文法の中で、『複合辞』という概念は積極的に扱われていない。むしろ、どの表現を重要な複合辞として扱うべきかという指標も明らかになっていない」^④と批判している。ただ、国語科における文法指導でも、複合辞を含めて文末で用いられる機能語を「文末表現」として扱い、意味カテゴリーごとに整理して示す取り組みがなされてきており、複合辞が全く取り上げられていないわけでもない。だが、文法教材における文末表現の扱いは縮小してきており、文法学習を通して文末表現に関する知識・技能が形成され、文章の表現・理解に役立てられるという可能性も低くなってきている。学校文法の枠組

みは守りつつも、文法指導において複合辞を取り上げるようにし、そこで形成された知識・技能を「読むこと」や「書くこと」の学習指導に活かしていくようにしていくべきだと考える。

文章の理解や表現に大きく関わる機能語といえは、助動詞・助詞の他に、接続詞を挙げることもできる。助動詞・助詞と同様に、接続詞は説明的文章に多用され、文章内容を理解するうえで重要な表現になっている。また、事を説明したり自分の考えを論じたりする際に、接続詞を用いることで文章を論理的に構成することができる。

接続詞については、副詞や指示詞との境界が問題とされるが、石黒(二〇〇八)は接続詞を「独立した先行文脈の内容を受けなおし、後続文脈の展開の方向性を示す表現」^⑥とし、一般に副詞・指示詞とされるものでもこの定義に当てはまる表現は接続詞に分類している。本稿もこの定義に従いつつ、複合辞の観点も加味しながら接続詞を認定していくが、そうすることで、従来は副詞とされてきた「ただ」「むしろ」、連語とされてきた「このように」「そうする」となどを接続詞と認定することができ、文章の展開が捉えやすく、文章を論理的に構成しやすくなる。学校文法の枠組みは守りつつも、文中での機能を重視して接続詞を認定していくことで、接続詞に関する知識・技能が「読むこと」や「書くこと」の学習指導に活かされていくものと期待できる。

三 調査の対象と項目

中学校説明的文章における機能語の出現状況を調査するために、本稿では教育出版中学校国語教科書(平成二八年度用)を使用する。⁽⁷⁾本教科書には、説明的文章が第一・二学年それぞれに四教材、第三学年に三教材掲載されているが、このうち本稿が調査対象とするのは以下の六つの教材文である。

中一：「笑顔という魔法」(池谷裕二・説明文)、「花の形に秘められたふしぎ」(中村匡男・説明文)

中二：「日本の花火の楽しみ」（小野里公成・説明文）、「学ぶ力」（内田樹・評論文）

中三：「新しい博物学」の時代」（池内了・評論文）、「文化としての科学技術」（毛利衛・論説文）

また、調査項目の表現は、学習指導要領に示された情報と情報との関係を踏まえて、「判断」「評価」「説明」を表すモダリティ^⑧と「原因・理由」「言い換え・例示」「総括」を表す接続表現^⑨とする。このうち「判断」「評価」を表すモダリティについては、第一・二学年で扱う「意見と根拠の関係」のうち「意見」を示す表現として、「原因」「総括」を表す接続表現については、第一学年で扱う「原因と結果の関係」を示す表現として、「言い換え・例示」を表す接続表現については、第二・三学年で扱う「具体と抽象の関係」を示す表現として取り上げることとする。

なお、調査項目の具体的な表現は、庵・高梨・中西・山田（二〇〇〇・二〇〇一）^⑩に挙げられた表現のうち、調査対象の説明的文章に見られた以下の表現とした。

判断：だろう（でしょう）、と思う、と考える（ように思える）、と考える、と考えられる（ように考えられる）、と考えることができる、のではないか、はずだ、ようだ、そうだ

評価：べきだ、なければならぬ、必要がある（ことが必要だ）、てもいい、必要はない、てはいけない
説明：のだ（のです）、のだろう、のでしょう、わけだ、ものだ

原因・理由：から（文中）、ので、ため（ために）（文中）、おかげで、て、だから、そこで、その結果、ゆえに、よって

言い換え・例示：つまり、すなわち、要するに、例えば、いわば

総括：このように、以上のように、こうして

調査に際しては、モダリティや接続表現といった機能語が抽出できるように中・長単位解析ツール Comanu^⑪を用いて文章解析を行い、解析の誤りや語認定の不備などを修正したうえで教材文から機能語を抽出し、教材ごとに機

能語の出現状況を見ていくこととした。

四 調査の結果

調査対象の教材文を長単位で解析・集計した結果、各教材文の総語数と品詞別^①の語数・割合は表1のようになった。

総語数に増減はあるものの、各教材文とも各品詞の割合はおおむね似通っており、中学校説明的文章を形成する語の傾向がわかる。

本稿で調査する機能語のうち、「判断」「評価」「説明」を表すモダリティは「助動詞」に、接続表現は「原因・理由」「言い換え・例示」「総括」を表す接続表現は「接続詞」および「助詞」に分類されるが、いずれの品詞も教材文間での大きな異なりはない。調査対象の六つの教材文で、助動詞は全体の14%を占め、動詞の出現割合と同率

表1 各教材文の総語数と品詞別語数・割合

	笑顔	花の形	花火	学ぶ力	博物学	科学	計/平均
動詞	100 (15%)	142 (13%)	161 (16%)	245 (15%)	144 (13%)	174 (15%)	966 (14%)
形容詞	20 (3%)	22 (2%)	25 (2%)	23 (1%)	18 (2%)	13 (1%)	121 (2%)
形容動詞	8 (1%)	12 (1%)	18 (2%)	38 (2%)	21 (2%)	30 (3%)	127 (2%)
名詞	193 (29%)	336 (31%)	323 (31%)	433 (26%)	358 (31%)	294 (26%)	1937 (29%)
副詞	12 (2%)	28 (3%)	19 (2%)	49 (3%)	19 (2%)	37 (3%)	164 (2%)
連体詞	11 (2%)	20 (2%)	13 (1%)	35 (2%)	12 (1%)	13 (1%)	104 (2%)
接続詞	7 (1%)	13 (1%)	10 (1%)	18 (1%)	18 (2%)	11 (1%)	77 (1%)
感動詞	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (0%)
助動詞	103 (15%)	135 (12%)	94 (9%)	251 (15%)	184 (16%)	187 (16%)	954 (14%)
助詞	214 (32%)	383 (35%)	374 (36%)	543 (33%)	375 (33%)	377 (33%)	2266 (34%)
総語数	668	1091	1037	1637	1149	1136	6718

表2 「判断」を表すモダリティの出現状況

	中1		中2		中3		計
	笑顔	花の形	花火	学ぶ力	博物学	科学	
だろう		2	1	2	2	1	8
と思う			2	4			6
と思える	1						1
と考える				1			1
と考えられる	3	1			1		5
のではないか						2	2
はずだ				1		1	2
ようだ	3			1	1	1	6
そうだ						1	1
	7	3	3	9	4	6	32

となつてゐる。また、接続詞は全体の1%で、各教材文とも接続詞の出現は限られてゐることがわかる。なお、「原因・理由」を表す接続表現の中には「接続助詞」に分類される語があるが、接続助詞が占める割合は助詞全体の9%となつてゐる。

また、調査項目の機能語を抽出・集計した結果、各教材文における機能語の出現数は表2の6つになつた。

「判断」を表すモダリティのうち、最も多く見られたのは「だろう（でしよう）」（8例）で、中一「笑顔という魔法」を除いて、各教材文に出現している。教材文の文体によつて普通体の「だろう」と丁寧体の「でしょう」に分かれるが、これらは筆者の判断を示す形式として中学校説明的文章で一般的に用いられてゐると言えよう。

次いで多く見られたのは、「と思う」（6例）、「ようだ」（6例）である。「と思う」は中二「学ぶ力」に4例、「ようだ」は中一「笑顔という魔法」に3例と、特定の教材文にまとまつて出現しており、これらの教材文を読み解くうえでの指標形式になつてゐる。

また、六つの教材文のうち、「判断」を表すモダリティが最も多く見られたのは、中二「学ぶ力」（9例）である。「学ぶ力」には、「と思う」を始めとして、「だろう」「と考える」「はずだ」「ようだ」が見られ、筆者の判断が様々なモダリティによつて示されてゐることがわかる。

表3 「評価」を表すモダリティの出現状況

	中1		中2		中3		計
	笑顔	花の形	花火	学ぶ力	博物学	科学	
べきだ				5			5
なければならぬ		1	1	2		1	5
必要がある		1		2	1	1	5
てもいい				2			2
必要はない				1		1	2
てはいけぬ	1	1					2
	1	3	1	12	1	3	21

表4 「説明」を表すモダリティの出現状況

	中1		中2		中3		計
	笑顔	花の形	花火	学ぶ力	博物学	科学	
のだ	6	7	5	9	7	10	44
わけだ	1				1		2
ものだ	1						1

次いで、中一「笑顔という魔法」(7例)、中三「文化としての科学技術」(6例)に多く見られるが、「笑顔という魔法」には「ようだ」「と考えられる」が文章中に繰り返し用いられており、これらの表現が筆者の考えを読み取るための指標形式になっているものと考えられる。

「評価」を表すモダリティのうち、多く見られたのは、「べきだ」「なければならぬ」「必要がある」であるが(5例)、このうち「べきだ」は中二「学ぶ力」に5例とまとまって出現している。また、六つの教材文のうち、「評価」を表すモダリティが最も多く見られたのも、中二「学ぶ力」(12例)で、判断と同様に、様々なモダリティを用いて筆者の評価が示されていることがわかる。

「説明」を表すモダリティでは、各教材文とも「のだ」が多く出現しており、その数は他のモダリティ形式を大きく上回っている。理由づけや言い換え、要約などを行いながら前述の内容と関連づけ、文章をまとめていく形式として、中学校説明的文章では一般的に用いられていると言えよう。「判断」「評価」のモダリティと組み合わせられていたり、「換言」「総括」の接続表現を含む文に用いられていたりしており、言い換えや要約を表す「のだ」は筆者の考えを読み取るための指標形式になっているものと考えられる。

表5 「原因・理由」を表す接続表現

	中1		中2		中3		計
	笑顔	花の形	花火	学ぶ力	博物学	科学	
から	4	1		1		3	9
ので		3	1	2	1	2	9
ため(に)		1	2		2	1	6
おかげで		1					1
て						2	2
だから		1		1			2
そこで		1			1		2
その結果					1		1
ゆえに			1				1
よって		1					1
	4	9	4	4	5	8	34

表6 「換言・例示・総括」を表す接続表現

	中1		中2		中3		計
	笑顔	花の形	花火	学ぶ力	博物学	科学	
つまり	3	1					4
すなわち						1	1
例えば				2	1	1	4
このように	1	1			1		3
こうして			2				2
	4	2	2	2	2	2	14

「原因・理由」を表す接続表現のうち、多く見られたのは「から」(9例)、「ので」(9例)であった。また、六つの教材文のうち「原因・理由」を表す接続表現が多く見られたのは、中一「花の形に秘められたふしぎ」(9例)、中三「文化としての科学技術」(8例)であった。

「換言・例示・総括」を表す接続表現では、「換言」を表す「つまり」が中一「笑顔という魔法」に3例とまとまって出現している。また、六つの教材文のうち「換言・例示・総括」を表す接続表現が多く見られたのも、「笑顔という魔法」(4例)であった。「笑顔という魔法」では「つまり」が筆者の考えを読み取るための指標形式になっているものと考えられる。

五 各教材文で扱うべき機能語

中学校説明的文章における機能語の出現状況を見てきたが、各教材文で扱うべき機能語とはどのような語だろうか。機能語の出現が特徴的な二つの教材文を取り上げ、機能語の出現状況から各教材文で扱うべき機能語を示していく。

○ 中一「笑顔という魔法」

笑顔の効用を実験や考察に基づいて説明した文章である。「問い—答え」の関係を中心にして文章が展開されており、疑問形式を用いて「問い」を提示し、その「問い」に関わる事実を挙げながら、そこから得られる知見を「答え」として述べている。

同じ漫画を読んでいるのに、なぜこのような実験データが得られたのでしょうか。謎を解く鍵は表情にあります。ペンを横にくわえたとき、顔の筋肉の使い方は、笑顔を作るときと似ています。ペンを縦にくわえたときは、沈んだ表情と似ています。つまり、この実験結果は、笑顔に似た表情を作りながら漫画を読むとおもしろく感じられることを示しているのです。ただし、笑顔をまねるだけで、決して笑ってはいけないことに注意してください。笑顔に似た表情を作るだけで、効果があると考えられるわけです。

(『伝え合う言葉 中学国語Ⅰ』三六頁)

実験時の表情の実際(事実)から得られた知見が、「つまり」「のだ」を用いることで、前述の内容を言い換え、結

論づける形で示されている。そのうえで、「と考えられる」を用いて、笑顔に似た表情でも楽しさや面白さを認識する効果があるという筆者の考えが示されている。なお、「わけだ」は前文の内容の言い換えであることを示している。また、実験から得られた知見も「つまり」「のだ」を用いて示されている。

おいしい、死、親切、褒める、負ける、笑う、失敗、暗闇、遊園地……

これらの単語が「楽しい」と「悲しい」のどちらの感情に属するかを、前の実験と同じような方法で分類してみました。実験の結果、ペンを横にくわえていると、楽しい単語を「楽しい単語だ」と判断するまでの時間が、悲しい単語を「悲しい単語だ」と判断する時間よりも短くなることがわかりました。つまり、笑顔は楽しいもの

のを見いだす能力を高めてくれるようなのです。

(『伝え合う言葉 中学国語Ⅰ』三七頁)

複数の実験ではなく、単一の実験から得られた知見のためか、推定の「ようだ」を用いて慎重に述べているものの、実験の結果から得られた知見が「つまり」「のだ」を用いてまとめられている。本教材文には「つまり」と「のだ」がセットで用いられている部分が三箇所見られるが、いずれの箇所も前述の内容を言い換え、要約することで段落の統括を行い、段落の内容にまとまりを付けている。

このように、本教材では「判断」を表す「ようだ」「と考えられる」、「換言」を表す「つまり」、「説明」を表す「のだ」が効果的に使用されており、これらの語が授業で扱うべき機能語であると言えよう。⁽⁴⁾ これらの機能語に着目することで、本文の要旨が捉えやすくなるとともに、実験や考察から得られた知見をまとめながら笑顔の効用を説明していく筆者の論じ方を捉えることができる。

○ 中二「学ぶ力」

学ぶ力とは何かを論じた評論文であるが、筆者の意見は「判断」を表すモダリティを用いて示されている。

「学ぶ力」は他人と比べるものではなく、個人的なものだと思います。「学ぶ」ということに対して、どれくらい集中し、夢中になれるか、その強度や深度を評するためにこそ「学力」という言葉を用いるべきではないではないか。そして、それは消化力や睡眠力と同じように、「昨日の自分と比べたとき」の変化が問題なのだと思います。
（『伝え合う言葉 中学国語2』一七九頁）

学ぶ力に関する筆者の意見が「べきだ」「のだ」を用いて示しつつも、「と思う」「ではないか」を用いて断定を回避する形で示されている。これらの機能語に着目することで、筆者の意見が押さえられるとともに、思索を重ねながら意見を述べていく筆者の論じ方を捉えることができる。

また、本教材には、読み手の納得が得やすい具体例を挙げながら、それを引き合いにして筆者の意見を述べている部分が二箇所見られる。

私は学力を「学ぶことができる力」、「学べる力」として捉えるべきだと考えています。数値として示して、他人と比較したり、順位をつけたりするものではない。私はそう思います。

例えば、ここに「消化力」が強い人がいるとしましょう。ご飯をおなかいっぱい詰り込んでも、食休みもしないで、すぐに次の活動に取りかかれる人はまちがいに「消化力が強い」といえます。「消化力が強いです。」と人にも自慢できます。しかし、それを点数化して他人と比べたりしようとは思いません。《中略》

私は「学力」もそういう能力と同じものではないかと思うのです。(『伝え合う言葉 中学国語2』一七九頁)

「例えば」を用いて「消化力」や「睡眠力」、「自然治癒力」といった読み手にとって身近な例を挙げることで、学力に関する筆者の意見が読み手に理解され、納得されやすいように示されている。

このように、本教材では「判断」を表す「と思う」、「評価」を表す「べきだ」、「例示」を表す「例えば」などの使用が特徴的が効果的に使用されており、これらの語が授業で扱うべき機能語であると言えよう。⁽¹⁵⁾ これらの機能語に着目することで、筆者の意見が捉えやすくなると共に、思索を重ねながら論を進め、身近な例を引き合いにしながら読み手の納得を得ていく筆者の論じ方を捉えることができる。

六 機能語に着目した説明的文章の学習指導

以上、中学校説明的文章における機能語の出現状況と各教材文で扱うべき機能語を見てきたが、最後に機能語に着目した説明的文章の学習指導について述べていくこととする。

機能語に着目した学習指導といつても、文章に見られる機能語をすべて扱うのではなく、当該教材文を特徴付ける機能語に限って取り上げるべきである。他の教材文に比べて出現数が多く、文章に述べられた事象の仕組みや筆者の考えの把握につながる機能語が取り上げるべき語句となる。中一「笑顔という魔法」であれば「ようだ」「と考えられる」「つまり」「のだ」、中二「学ぶ力」であれば「と思う」「べきだ」「例えば」などがそれに当たる。

また、こうして選定した機能語が当該学年で指導すべき情報と情報の関係の把握に関わり、情報の扱い方の学習指導につながることを望ましい。こうした観点から見ると、中一「笑顔という魔法」における「ようだ」「と考えられ

る「つまり」「のだ」や、中二「学ぶ力」における「と思う」「べきだ」「必要がある」は、「意見と根拠の関係」のうち「意見」の把握につながるものである。ただ、今回調査した説明的文章は平成二〇年告示学習指導要領に準拠した平成二八年度版教科書であり、平成二九年告示学習指導要領に示された情報と情報の関係を踏まえたものではない。新教科書における説明的文章が学習指導要領に示された情報と情報の関係とどのように対応し、それに関わる機能語としてどのような語句が選定できるかを見ていくことが今後課題となるだろう。そして、こうした情報が教科書の学習の手引きや指導資料などに記載され、学習指導の参考にされるようになることが望まれる。¹⁶⁾

また、学習指導の方法については、先に着目する機能語を指定し、それを指標として情報と情報の関係を捉えている形も考えられるが、情報と情報の関係を押さえながら事象の説明や筆者の考えを捉えていく中で機能語の働きに気づかせていく形のほうが望ましい。前者は形式に着目して読むので文章内容を捉えやすいが、筆者の論じ方までは捉えにくい。一方、後者は文章内容に加えて文章展開や筆者の論じ方も踏まえて機能語の働きを見ていくので、実際に文章を書く際に文章展開や論じ方と関連付けながら機能語を使用する技能も養うことができる。このような形で学習指導を行うことで、説明的文章の「読むこと」指導の中で情報と情報の関係を系統的に扱うことができ、文章内容の把握だけでなく筆者の論じ方の把握と評価をも可能とし、論理的に文章を構成する能力の育成にもつなげることができ、「知識及び技能」として「情報の扱い方」が新設されたことで、文章の内容を読むことに終始することなく、文章の内容と形式を関連付けて読むことが、説明的文章の学習指導において重要であると改めて確認されたと言える。

今後は、他社教科書や新教科書の説明的文章における機能語の出現状況を調査して、情報と情報の関係と関連付けながら学年段階別に取り上げるべき機能語を選定するとともに、機能語に着目した情報の扱い方の学習指導の実際を具体的に示していきたい。また、説明的文章の学習指導における情報の扱いを踏まえて、それを論理的な文章を書く学習指導にどのようにつなげていくかについても具体的に示していくこととしたい。

(注)

- (1) 日本語学会編(二〇一八)『日本語学大辞典』東京堂出版、二二一頁
- (2) 同右、七九〇頁
- (3) 渡辺由貴(二〇一七)「BCWJ」国語教科書データにおける複合辞の学年別使用状況―国語教育での指導の可能性―、『早稲田日本語研究』第二六号、一〇―一二頁
- (4) 渡辺由貴(二〇一八)「BCWJ」教科書データにおける複合辞の教科別使用状況―国語教育を視野に―、『国立国語研究所論集』第一五号、一九五頁
- (5) 山室和也(二〇〇八)『文法教育における構文的内容の取り扱ひの研究』溪水社、一二八―一四七頁
- (6) 石黒圭(二〇〇八)『文章は接続詞で決まる』光文社、二七頁
- (7) 教育出版『伝え合う言葉 中学国語』平成二八年度版
- (8) 話し手が事柄をどのように捉え、どのように述べるのかを表す表現のこと。(庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(二〇〇〇)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク、一七五頁)「ようだ」「らしい」「や」「ね」「よ」のように単独の助動詞・助詞で構成される表現の他に、「と思う」「かもしれない」「なければならぬ」のように複合辞に相当する表現も含む。
- (9) 先行部と後統部の意味的関係を示す表現の総称。接続表現という名称を用いるのは、接続詞と接続助詞を一括し、接続詞相当の語結合を含め、連文的な機能を持つ副詞的・指示詞的な表現を含むためである。(日本語学会編(二〇一八)『日本語学大辞典』東京堂出版、五六九―五七一頁)
- (10) 前掲(8)、および庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(二〇〇二)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

- (11) 「中・長単位解析ツール Comainu (試用版)」 <http://comainu.org/> なお、データ化に際しては、国語教育・文章表現ゼミの学生の協力を得た。
- (12) 解析の誤りや語認定の不備の修正にあたっては、北原保雄編(二〇一〇)『明鏡国語辞典第二版』大修館書店を参照した。
- (13) 品詞別の集計にあたっては、国語科教育への活用を視野に入れ、学校文法に準拠したものとしている。
- (14) 本教材では、学習の手引きに当たると「みちしるべ」において、読者を説得するための筆者の工夫として「つまり」「のです」が用いられているとし、これらの表現に着目して読むことで文章に書かれた内容を捉える手がかりが発見できるようになるとしている。(『伝え合う言葉 中学国語Ⅰ』三九〜四〇頁)
- (15) 本教材では、「みちしるべ」において、「例えば」「逆に」が用いられている箇所を印を付け、これらの語がどのような役割を果たしているか考えるよう指示がなされている。(『伝え合う言葉 中学国語Ⅱ』一八四頁)
- (16) 本稿の調査対象である教育出版中学校国語教科書『伝え合う言葉 中学国語』に関しては、学習の手引きにおいて教材文を読むうえで着目すべき表現が挙げられている。中一「花の形に秘められたふしぎ」では「この」「こうした」「このように」、中二「日本の花火の楽しみ」では「のだろうか」「と思う」「という」「のだ」、中三「新しい博物学」の時代」では「やがて」「さらに」「今や」「ならば」と「その結果」、中三「文化としての科学技術」では「わけではない」「ほどだ」「このことだ」「つもりだ」「ようだ」が挙げられているが、いずれも機能語に相当するものである。当該教材文で扱うべき機能語が明示され、文章を読む際の着眼点が明確になって、文章内容や要旨、筆者の論じ方の把握がしやすくなっているが、今後は新学習指導要領に示された情報と情報の関係との関連付けを図ることが必要となってくるだろう。